

る。最も危惧されるのは、そういった見解を基礎として考古学資料を解釈していくことであり、それは「位相の無い定説」を産み続けることになる。その部分を補完できる可能性を考古学は秘めているはずである。

おわりに

総体としての歴史学のなかで、文献史料や考古資料は、それを構成する一資料としては同じ位相にあることをまず強調したい。そのうえで、それぞれの手法を吟味した研究がなされる必要があるだろう。考古学的手法を用いる文献史学者、文献史料を用いる考古学者であることこそが、総体としての歴史を叙述するに当たって必要なことと認識している。冒頭の、「考古学者が必要とする文献史学研究」とは、基本的には考古学者が実施すべきものと個人的には考えている。

その際に、とくに考古学の側で重要なのは、立論の基礎となる概念の整理を通史的に行うことと考える。もしも、考古学的に観察される「物の移動」が、分析の結果は同じ現象と見なされるのに、弥生時代以前では「物々交換」とされ、中近世では「流通」とされるような状況が生じているとすれば、学問的には大きな問題であろう。考古学も、研究の個別分散化の進展で、対象とする時代以外の議論には疎遠となりがちであるが、それは何とかしなければならない。仕事上「好きな時代の遺跡」ばかり選べるはずのない(=どんな時代にも首を突っ込まざるを得ない)埋蔵文化財行政に従事する研究者は、その深刻さを最もよく理解していると思われる。だからこそ、こういった問題に対し積極的に発言すべきだと思う。

奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点を検討する視点 (報告要旨)

矢田俊文(新潟大学人文学部)

はじめに

中世考古学、文献史学(日本中世史)、歴史地理学それぞれがもつ特質をさらに発展させることがまず重要である。その上で、学融合を目指す必要がある。

#### 1. 学融合の試みについて

##### a 学融合を試みる必要のある遺跡

中世考古学と文献史学(日本中世史)の学融合を目ざすといってもすべてのことがらについて行なうことは現実的ではない。まず、墓地、経塚、居館・城などで、学融合の試みをする必要がある。

墓地遺跡では文字が書かれた遺物が出土する場合がある。文字が書かれていれば書風の検討によっておおよその年代がわかる可能性がある。また、年号が書かれた卒塔婆が出土する場合もある。新潟県白根市の浦廻遺跡では元応二年(1320)と書かれた卒塔婆が出土した。この遺跡は石塔・陶磁器が出土していないが多くの卒塔婆が出土した興味深い遺跡である。一つの基準となる遺跡であろう。このような遺跡は、考古学・文献史学双方の検討がなされるべき遺跡であると考えられる。

経塚には文字が書かれた経典が納められる。書風が検討できる遺跡であるから、これも考古学・文献史学双方の検討がなされるべき遺跡であろう。

しかし、経塚の研究は文献史学の側はあまり熱心でないように思われる。一方、考古学では経塚の研究は盛んである。けれども、考古学の側の経塚についての関心はもっぱら外容器にあるようである。そのため、外容器ほどには礫石経などに興味を示さないようである。

礫石経に注目すると、外容器の研究からはわからない経塚の歴史像が浮かび上がって来るのではな

かろうか。礫石経に注目すると、12世紀後半を中心とした時期に石に経典を書写するということが流行ったようである。

12世紀前半から13世紀初頭の大物浦遺跡（兵庫県尼崎市）からは、経典が書写された約1100点の扁平な石が出土している。平清盛は大物浦遺跡とそれほど離れていない大輪田の泊（神戸市）の修築の際に一切経を書いた石を沈めて島を作らせている（平家物語）。平泉では、「如法経の石をば、結縁に持たせ給うべし」（原文カタカナ）と書かれた木簡が出土している。

12世紀後半～13世紀前半の広隆寺弁天島経塚（京都市）は経塚を作るために島が作られており、多字の礫石経が出土している。寺ノ上経塚（岩手県前沢町）では、12世紀後半の渥美の壺の上に10個体以上の経典が書写されているかわらけが載せられる状態で出土している。このような事例をみると、12世紀後半を中心とした時期に石に経典を書写するということが流行ったと考えられるのではなかろうか。経塚は経典が書写された紙・石・かわらけを検討の中心に据えなければ解明できない遺跡である。

#### b 学融合のための研究方法について

学融合のためには、遺跡の報告書が作成される以前でのさまざまな分野の検討会が重要である。今回はその試みである。よって、成果を持ち寄って披露し、そこでえた情報を持ち帰る場所ではない。それぞれの学問がもつ長所を理解しあう場にした。中世考古学でも文献史学でもない学問が学融合ではなく、どちらかに学問的基盤をもち、その学問を発展させる研究をしながらも、他分野の学問の特徴を理解しその成果を吸収できる能力をみにつけることによって、自らの分野の研究をさらに発展させる。そういう研究会にしたい。

### 2. 奥山荘下町・坊城遺跡D地点について

#### a 中世考古学・文献史学・歴史地理学それぞれの成果がある地点

下町・坊城遺跡D地点のすぐ近くには江上館（国史跡）・下町・坊城遺跡A・B・C地点があり発掘が行なわれ、考古学的な検討が行なわれている遺跡である。さらに、文献史学では、下町・坊城遺跡D地点は奥山荘中条にある遺跡で、中条家文書等があることから、文献の研究成果もある地点である。さらに、奥山荘波月条絵図があることから、歴史地理学の成果もある地点である。

#### b 奥山荘下町・坊城遺跡D地点は茂連屋敷か

奥山荘下町・坊城遺跡D地点は奥山荘波月条絵図に描かれている茂連屋敷なのかどうか検討する必要がある。

#### c 絵図の描かれ方について

もし、奥山荘下町・坊城遺跡D地点が茂連屋敷であるとするならば、波月条絵図の描かれ方の検討が必要である。

#### d 京都系てづくねのかわらけと日本海側に所領をもつ地頭との関連について

奥山荘下町・坊城遺跡D地点では、かわらけは京都系てづくねのかわらけしか出土しない。奥山荘の地頭はなぜ鎌倉の影響は薄いのかについて、検討する必要がある。

#### e 11・12世紀の遺構・遺物と城氏の関連について

奥山荘下町・坊城遺跡は11・12世紀代の居住区が存在する。奥山荘には地頭が補任される以前から領主の存在が確認できる。白河荘（新潟県笹神村・安田町・水原町等）を本拠としていた城氏の一族は、建仁元年（1201）4月、城長茂の甥資盛と板額が鳥坂山（新潟県中条町）に蜂起している（吾妻鏡）、奥山荘にも拠点を持っていたことがわかる。また、阿賀野川水運により縄文時代より越後と深い関連をもつ会津地域にも城氏と関連する遺跡がある。12世紀第2四半期を中心とする陣が峯遺

跡（福島県会津坂下町）も城氏に関連する居館であるとの伝承がある遺跡である。阿賀野川の最上流に位置する恵日寺遺跡（福島県会津磐梯町）も城氏と関連する伝承をもつ。恵日寺には中世の境内図が存在する。境内図には橋が描かれ、阿賀野川水運を恵日寺が掌握していたことがわかる。奥山荘下町・坊城遺跡は地頭の支配の問題だけではなく、奥山荘を越えた城氏の支配の問題の解明も迫られる。

#### [参考文献]

『笹神村史 資料編一 原始・古代・中世』笹神村、2003年

『浦廻遺跡』新潟県教育委員会、新潟県埋蔵文化財調査事業団、2003年

『福原京とその時代』神戸市教育委員会、神戸市埋蔵文化財センター、1996年

入間田宣夫『都市平泉の遺産』山川出版社、2003年

百瀬正恒「経塚出土陶磁器の特異性-関西の主要遺跡の分析から-」『日本貿易陶磁研究会 第24回研究集会資料集「経塚と陶磁器—その地域性」』2003年

及川真紀「東北地方の経塚と陶磁器」『日本貿易陶磁研究会 第24回研究集会資料集「経塚と陶磁器—その地域性」』2003年

奥山荘政所条遺跡群の展開—下町・坊城遺跡 D 地点の新知見を加えて—（報告要旨）

水澤幸一（新潟県中条町教育委員会主査）

#### 1 政所条遺跡群の概要

江上館は15世紀の武家居館であり、中条本家が居住者と考えられる。下町坊城 A 地点は、西側に11世紀頃からのものがみられ、15世紀まで居住空間であった。15世紀段階では、石組側の井戸がみられ、家臣団屋敷であったと考えられる。同 B 地点は、護摩を焚いた痕跡が認められ、15世紀段階に密教寺院が存在していたことが判明している。同 C 地点は、12～16世紀まで居住空間であった。13世紀代のかかわりが大量に出土しており、D 地点が見つかるまでは C 地点が当時の中心地点と考えていた。発掘調査は、全体で平成3年～11年まで行われ、現在は江上館が史跡公園としてオープンしている。それまでの調査成果は、『下町・坊城遺跡 V』（2001）にまとめているが、平成15年度に D 地点の鎌倉時代屋敷が見つかったため、改めて遺跡群の位置付けを考え直さねばならないこととなった。

#### 2 下町・坊城 D 地点北半（坊城館）の概要

平成15年度の発掘調査で、鎌倉時代の屋敷跡があたり、9月～10月の追加確認調査で区画溝の範囲を追跡したところ、南北60m強で東西80m弱の屋敷地であったことが判明した。ただし西辺は、数条の南北溝が存在しており、屋敷区画が動いている可能性がある。建物は東寄りに集中していて、同じ場所に何度も建て直されており、4～5つの群を構成している。これらのほとんどが総柱建物であり、鎌倉後期のものである。したがって、波月条近傍絵図に描かれた領主屋敷に相当する建物と考えられる。詳細な遺構変遷については、来年度刊行予定の報告書で検討することとしたい。なお西側には遺構が少なく、広場的な空間であったと考えられる。

井戸は8基以上見つかっているが、その中に石組み側を持つ井戸がある。北陸では基本的に15世紀代に普及し始めるが、ここでは14世紀前半代に現れていることが注目される。金沢でも近年、鎌倉以前に遡る例（大桑ジョウデン遺跡）が見つかっており、古い時期から部分的な技術伝播があった